

こんな出会いに こんな決断

東京都江東区
きしだ歯科クリニック院長 岸田宏二



プロフィール
昭和60年、鶴見大学歯学部卒業、同大学歯学部第一補綴学講座入局。中央区銀座で勤務。昭和62年より千代田区で勤務。平成2年、きしだ歯科医院開設。平成18年、きしだ歯科クリニック移転開設。日本先進インプラント医療学会専門医。日本口腔インプラント学会・日本歯科医師会・日本歯周病学会・日本歯内療法学会・日本臨床歯周病学会・日本顎顎蓋機能学会・日本アンチエイジング歯科学会各会員。日本顎咬合学会認定医。日本糖尿病協会歯科医師登録医。

「生来の無精者、その上、歯医者通いは大の苦手。しかたなく勤務先近くの歯科医院に通いましたが、予約制でつい億劫になってドタキャンばかり。気づけばわがマンシヨンのお隣が岸田先生、このままじゃいけないと意を決して飛び込みました」

田辺克哉さん（六三才）は、出勤前後に通院できる上に、患者（特に子ども）に対する岸田医師の穏やかな受け答えが気に入って通い続けることになる。

他院で作った義歯に違和感があり、手入れも面倒なのではずしていることを同医師に告げるとインプラントについて詳しく説明してくれたので手術を決めた。

「子どもの頃、祖母も母も総入れ歯で、その大変さは知っていましたから。それと入れ歯をはずすと面相が変になるので怖れていました。母などは、怯える私

「食いしん坊の私ですが、手術前は嘔むことがおっかなびっくりで味を楽しむことができませんでした。今は、食事もお酒もおいしくなりました」

この手術（平成十四年）に満足した田辺さんは、平成十九年にも左上二本をインプラントにした。嘔み心地がよくなったと感じる度に、いつも忙しそうなお医者さんが「医者の不養生」にならぬようにと祈っている。

三村佐知子さん（四六才）は、他の歯の治療で訪れたところ、ブリッジにしていた歯の前後の歯にかなりの負担がかかっていることがわかり、インプラントにした。してみると他の歯の負担がなくなり、よく嘔め、見た目も自然な歯並びになったので、三村さんは父親にもインプラントを勧めた。すると、父親もすぐに手術を受け、嘔み具合が良いとたいへん喜んでいて。同医師は「家族みんなの先生」になっているようだ。

白鳥理子さん（四五才）は、きしだ歯科クリニックの開業当初（当時は、きしだ歯科医院）から通院しているが、治療を受けた箇所の治療が必要になったことが一度もない。そのことは近所でも評判だとか。

その岸田医師から勧められ、「CTで撮影したデー

に「おまえを産んだおかげで歯が一本、一本なくなつたのよ」なんて言うんですから」

子どもの頃の思い出が蘇り、田辺さんの決断に拍車をかけたわけである。

「インプラントの土台にピッタリの骨格をしていますね」

手術前、同医師は田辺さんの顎の骨を検査したとき真顔でこう言ったそう。田辺さんは「患者を安心させるテクニクだな」と思ったそうだが、この後、インプラントの構造や素材、手術の種類、入れ歯やブリッジとのメリット比較、手術手順、治療期間、費用などについて詳しい説明があり、誠実さを感じたという。こうして右下の奥歯二本を手術。痛みはなかったが、予備段階の問診、検査、エックス線写真撮影、消毒など、念入りなのは驚いたという。

タをもとにシミュレーションしますので、より安全で確実な手術が可能です」とのことだったので手術を決めた。

その「左の上、前から五番目の一本」の手術は簡単です。手術なんてやめなさい」と言っていて心配していた白鳥さんの母親が拍子抜けするほどだった。術後にクリニックから専用歯ブラシや液体歯磨きがプレゼントされた。さりげない心配りをうれしく思った。

そして二か月後に新しい歯が入った。見た目が良く、何でも普通に嘔めて快適。それが術後もずっと続いている。平成十二年の六月以来だから、手術が成功したことと、白鳥さんの手入れが良いことがよくわかる。

「その後、診療室はメディカルモールに移転して装いは一新、リアフリーにしたり、歯科衛生士さんが相談に乗ってくれるカウンセリングルームをつくったり。岸田先生は、やっぱり患者さんのことを考えてくれてますよね」

● 先生からのコメント ●

移転にもなつて解析用のエックス線撮影装置や術後の傷の治りをよくするレーザーを導入するなど、器材を充実させました。それと同時に、エックス線写真、模型、図などを使った説明もさらに詳しくしています。